
それでも君はここにいる

瀬能こゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも君はここにいる

【Nコード】

N8875W

【作者名】

瀬能こゆき

【あらすじ】

里珠しずは一つ年上の幼馴染・大和やまとと付き合い始めて一年がたった。そんな時、大和が一人の友達を連れてくる。彼の名前は葵あおい。彼は静かに里珠を見つめる。初対面のはずなのに、その眼差しは懐かしく、そして切なかった。ファンタジー要素を含んだ恋愛ストーリーです（この物語は他所でも同時に投稿しています）

忘れたくない

忘れたくない思い出がある。

わたしの隣には大好きなあの人がいた。

二人で奏でる初めての連弾。

曲目は「エンターティナー」

私は第一パートだったけど、その時のわたしにとっては難しかった。だけど、あの人はわたしよりも難しいはずの第二パートを易々と弾いて、子どもながらに自分が足を引っ張っていることが心苦しかった。

それでもあの人がわたしに文句を言うことはなかった。憶えてないだけだろうか。ううん、違う。本当にあの人は優しくかったんだ。

完成した時は、二人で笑ってハイタッチした。

その時のあの人の弾けるような笑顔。

忘れたくない。

忘れたくない　なのに。

思い出そうとすると、水面に波紋が広がるようにその笑顔が揺らぐ。

なぜだろうとそれを不思議に思う気持ちも、ゆらゆらと揺れて不確かなものになる。

ゆらゆら揺れて遠くへ消える。

「忘れたくない」
そしてただ、その思いだけが残される。

「んじゃ、行ってくるね!」

居間に顔だけ覗かせて声をかけると、せんべいをかじりながらテレビを見ていたお母さんが、目を丸くして振り向いた。

「あら、もう行くの? 三時からでしょ、早くない?」

確かに、今はまだ一時になったばかりだ。早いと言えば早いけど。

「んー。バイト行く前にちょっと大和やまとんちに寄ってくから」

隠すことなく言うと、お母さんも「あら、そう」と平然と答えた。わたしと大和の付き合いは、もうすっかり公認だ。

「というところで、行ってきます」

「あ、里珠さとじゆ、ちょっと待って!」

お母さんが慌てたように立ち上がった。

「大和くんち行くなら、昨日の煮物持ってってあげなさいよ。残り物で悪いけど」

そう言いながらバタバタと動き出している。わたしは大袈裟なため息をついた。

「いらないうって。大和、今日外で食べるかもしれないでしょ。そして無駄になるじゃない」

「あんたが外食ばかりじゃ駄目よって大和くんに言ってあげなさいよ。どうせ手料理作ってやるなんて気がきいたことやってないんでしよう。これ、冷蔵庫に入れば明日の朝までは持つだろうからはい」

タッパーに移した里芋の煮物を手早く風呂敷に包み、お母さんはそれを差し出した。わたしは渋々それを受け取る。

「……まあ、大和はお母さんの料理が好きだから、そりゃあ喜ぶとは思っけど」

「でしょー。さ、ほら。いつてらっしやいー!」

『お母さんの料理が好き』の言葉がよほど嬉しかったのか、お母さんは満面の笑顔でわたしの背を押した。我が母親ながら本当に単純だ。

十月に入って、ようやく「涼しい」という言葉がぴったりの気候になった。日差しもうららかで心地いい。わたしはのんびりと歩きながらその日差しを楽しむことにする。

大和の家はわたしの家からほんの二、三分しか離れていない。かなり近所だ。つまり、わたしと大和はいわゆる「幼なじみ」である。学年は大和の方が一つ上だけど、昔から何かとよく一緒に遊んだ。大和のお母さんがわたしのピアノの先生でもあったからだろうと思う。家に行くことが多かったから。

この辺りでも一際大きな二階建ての家の前でわたしは足を止めた。表札にはお洒落なローマ字で「YUZUKI」と書かれている。漢字で書くと「柚木」である。この大きな家が大和の家だ。この家に

今は大和一人で住んでいる。大和の両親は今イギリスにいる。一年ぐらい前に、海外赴任になった大和のお父さんに美和先生（わたしは未だに大和のお母さんをそう呼んでいる）も一緒について行った。当時大学に入ったばかりだった大和は日本に残ることになり、以来ここには大和一人だ。

立派な門構えにも臆することはなく、わたしはドアホンを押した。昨日この時間に行くように伝えておいたから、たぶん中にいるはずだ。だけど、しばらく待っても応答がない。

「あれ……?」

どこかに行ってしまったのだろうか。それとも寝てるのか。

もう一度ドアホんに手を伸ばした時、後ろから「里珠!」と呼び掛けられた。そこにいたのは、自転車に乗った、ショートカットの良く似合うスラリとした女の子。

「妃実ちゃん」

妃実ちゃん　君島妃実香きみしまひみがもこの近所に住む幼なじみだ。一見ボーイッシュだけど、とても美人。大和と同じで一つ年上だ。

「おひさー。何、今日はお家デートなんだ?」

からかう様な口調に、わたしはただ笑った。

「そういうわけじゃないよ。でも、出ないんだよね、大和」
「あらま。寝てんじゃないの?」

妃実ちゃんは自転車から降りてわたしの隣に來ると、遠慮なくド

アホンを連打する。わたしは呆れ半分で、自分より少し背の高い妃実ちゃんの横顔を見上げた。

「ちょっと妃実ちゃん。それやりすぎ」

「だって、出ないんでしょ」

妃実ちゃんはさらに連打。もう十回以上は押しそうだ。

「……出ないわね」

「うん」

ここまでやっても応えないところを見ると、やっぱり留守なんだろう。ちゃんと言っておいたのに忘れたのだろうか。別に大した用事があったわけではないしそれはそれで構わないのだけど、問題はこれだ。

わたしはため息をつきながら風呂敷包みを持ち上げた。お母さんから持たされた煮物。門の前に置いて行くわけにもいかないし、持ち帰らないとだめだろう。ちょっとした手間だけど、それがかなり億劫だったりする。

妃実ちゃんが包みを見て首を傾げた。

「それ何？」

「うちのお母さんの手料理。大和に持って行って。でも持って帰らなきゃ」

「あー、それは面倒ね。大和、ちょっと買い出しに出てるだけかもよ。もうちょっと待ってみたら？ わたしも付き合っただけあげるし」

そう言って妃実ちゃんは門に寄りかかった。ガシャン、と派手な音は立てたが、立派な鉄の門は少しも揺るがない。

「妃実ちゃん、どっかに出掛ける途中だったんじゃないの？」

「うん、でも別に急ぎじゃないもん。ちょっと本屋にね。取り寄せた画集が入ったって連絡来たから」

「そうなんだ」

妃実ちゃんは美大の学生だ。言っている「画集」はその関係のことだろうと想像しながら、わたしも妃実ちゃんと同じように門に寄りかかった。時計をみて時間を確認する。バイトまではまだ余裕があるし、わたしも時間の心配はなさそうだ。

「それにしても、あんたたちまだうまくいってるのね」

妃実ちゃんの言葉に、わたしは苦笑いした。妃実ちゃんの毒のある物言い、昔から変わらない。

「うまくいってるよ」

「ふうん。つまんないわね」

「え？」

さすがにぎょっとしてしまふ。妃実ちゃんはくすくすと笑った。

「冗談よ。でも、大和と里珠が付き合うつて言いだした時、正直、うまくいくのかなあって不安だったのよね、わたし」

それは初耳だ。不穏な言葉にわたしはただ妃実ちゃんを見返した。妃実ちゃんは少し目を伏せて独り言のように続ける。

「でも、もう一年も続いてるんだね」。心配するだけ無駄だったかな。取り越し苦労だった」

「妃実ちゃん？」

なんだか妃実ちゃんの言葉、すごく意味深に聞こえる。もう少し深く聞き返してみようかなとした時、妃実ちゃんが顔を上げてパツと目を見開いた。

「あ。大和、帰って来たよ」

わたしも妃実ちゃんと同じ方向に目を向けると、人が歩いてきているのが見えた。遠目からでも長身とわかる男性。そして少し長めの癖のある髪。確かに大和だ。でも、一人じゃない。同じ年頃の男性と一緒に。その男の人もまた大和と同じぐらい背が高い。

「友達かしらね。彼女が来るって言うのに友達連れてくるなんて、気の利かない男ね」

妃実ちゃんの毒舌にただ笑っていると、大和がわたしたちに気付いて手を振ってきた。そして隣の人と何か言葉をかわしている。おおむね、わたしたちのことを説明してたりするのだろう。

「あ。あ。あの人どこかで……」

二人の顔がはつきり見えるぐらい近付いてくると、妃実ちゃんは訝しげに眉を寄せた。どこかで会った人なのだろうか。

大和はわたしたちの前に来ると、精悍な顔を申し訳なさそうに歪めて片手を上げた。

「ごめん、里珠。ちょっと買い物に出た。　　って、なんで妃実香もいるの？」

「いて悪かったわね。あなたの可愛い彼女が一人で待ちぼうけ食ってんのに付き合ってたのよ」

「ああ、そりゃどうもありがと」

妃実ちゃんの喧嘩腰をさらりと流すと、大和は穏やかな眼差しを再びわたしに向けた。

「だいぶん待った?」

「ううん。大丈夫。妃実ちゃんと喋ってたから」

「ほら、みなさい。感謝されてるじゃない」

「だからありがとってば」

「ありがとって態度じゃないくせに。それより、大和。彼は?」

妃実ちゃんが遠慮なく、少し離れたところに立っていた友達らしき人を示す。その彼は自分に注意を向けられ、少しひきつったように微笑んだ。改めて見ると、男の人にしておくには勿体ないぐらい綺麗な人だった。可愛らしい、という表現の方が近いかもしれない。男の人に対してすごく失礼だけど。

「あ、ああ、こいつね……」

大和がどこか困ったような笑みを浮かべ、その彼の肩を抱くようにしてわたしたちの前に押しやった。そしてたっぷりと間を取り、ゆっくりと彼を紹介した。

「こいつ　くんとおあせい久遠葵、だよ」

その直後、ばさりと音がした。妃実ちゃんが持っていた自分のトートバッグを落としたのだ。

「? どうしたの?」

妃実ちゃんは目を真円に近いくらい見開き、口許を両手で覆った。その手が 違つ、体全体が小刻みに震え出す。見開かれた目が注ぐ視線の先には久遠さんがいた。

「妃実ちゃん？」

「うそ……」

うわ言のような呟きが妃実ちゃんの口から漏れた。

「葵のわけが」

妃実ちゃんの体が膝から崩れ落ちる。

「妃実ちゃん！」

わたしは慌てて体を支えたけれど、重くて一緒に倒れそうになってしまう。それがふと軽くなり、気付くと大和が反対側から妃実ちゃんの体を支えてくれていた。とりあえず、ホツとしてわたしは息をつく。

それにしても、どうして妃実ちゃん わたしは久遠さんに目を向けた。

久遠さんの真つ直ぐな視線とぶつかる。

わたしは思わず息をのんだ。

久遠さんはわたしを見ていた。

倒れそうな妃実ちゃんではなく、それを支える大和でもなく、ただ真つ直ぐに、わたしだけを静かに見つめていたのだ。

初対面だよ　妃実ちゃんはそう言った。

コンビ二の前で偶然に会った友達だよ　大和はそう言った。

「久遠葵」というその人のことを。

当の久遠さんは、その綺麗な顔にただ薄く笑みを浮かべているだけだ。

なんか釈然としない。

初対面の大和の友達を見て、妃実ちゃんは何をあんなに立てなくなるほど驚いていたのだろう。大和も大和で、そんな妃実ちゃんを見てもわたしみたいに慌てたりなんかしなかった。まるで妃実ちゃんの反応を最初から予想してたように。

絶対に変だ。全くもって釈然としない。

本当は妃実ちゃんは久遠さんのこと知ってるんじゃないだろうか。だって、妃実ちゃんのはっきりと「葵」と久遠さんの名を呼んだ。そのことを、大和と久遠さんが離れた時に妃実ちゃんに指摘すると、妃実ちゃんは笑って「言つてないよ？」ととぼけた。じゃあわたしの聞き間違いか……違う、そんなことはない。

大和と目が合う。

いつも穏やかな彼の視線が、どこか不安げに揺れていたのをわたしは見逃さなかった。

大和はどうしてそういう顔をするんだろう。

大和と妃実ちゃんと久遠さん。

きつと三人の間には何かがあるのだ。たぶん、それをわたしだけが知らない。

なんだかモヤモヤとした気分になった。仲間はずれにされているような、そんな子供じみた嫉妬。

その後、大和の家にみんなで入り、お茶なんて飲んでのみたけれど全然会話は弾まなかった。大和と妃実ちゃんのどこか白々しい近況報告と、たまにそれにわたしも加わる程度の雑談。久遠さんにい たってはほとんど口を開かなかった。久遠さんの声聞いたのは「はじめまして」の挨拶ぐらいだったような気がする。

彼は一体どういう人なのだろう？

深く聞きたかったけど、その場では聞けなかった。聞いたところで大和も妃実ちゃんも「友達」「初対面」以上のことはきつと答え ないだろうことはわかっていた。

それに、本当は聞くのが怖い気もした。

久遠さんはわたしをまっすぐに見る。その目がわたしは怖かった。知らない人なのにずっと前から知っているような、そんな気にさせられる視線。

懐かしい　なぜかそう感じた。そう感じると同時に胸のあたりが苦しくなった。それはこれまで味わったことのない胸の痛みだった。

『あなたは一体誰ですか？』

聞きたいけど、聞けなかった。

*

*

*

「今日はお客さん引けるのが早いみたいねー」

バイトの先輩、夕子さんがカウンターに頼杖をついてホールを覗きこんできた。ホール側でちょうどカップを補充し終えたわたしは、振り返って夕子さんに応える。

「今日日曜日だからでしょうね」

客席には四、五組のお客がいるだけだ。食後にゆっくりしている人たちがほとんどである。壁の時計は午後八時四十分を示している。いつもならもう少し賑わってもいるが、日曜日のこの時間はたいがいこんなものだ。週の初めくらいは早く帰宅して次の日に備えたいと思う人が多いのかもしれない。

ここはわたしがバイトしている喫茶店。個人で経営しているお店だけれど、それなりに広く繁盛している。喫茶店と言っても軽食もデザートもわりと充実しているし、なにより駅から徒歩五分圏内という好立地のおかげだろう。

わたしがここで接客のバイトを始めたのは今年の四月に大学に入ってからだ。店長は気のいいおじさんで、バイトの仲間もみんな良い人たちだ。とても居心地のいい場所である。家からも近いし、ここを見つげられて本当に運が良かったと思っている。

夕食時のピークを過ぎた今は、わたしと夕子さんの他に、もう一人高校生の平くんたいらという男の子がいるだけだが、三人でも十分ゆつくりとやっていけるほど落ち着いている。バイト上がりまであと二十分。このまま穏やかに終わってくれればいいけど。

「いらつしゃいませー」

平くんの声に夕子さんのお喋りを中断する。反射的に「いらつしゃいませ」と声を上げたわたしは、店の入り口に立つ人を見て動きを止めた。

「え……」

目を疑ってしまった。そこにいたのは、昼間知り合っただばかりの「久遠葵」その人だった。

「雨宮さん？」

動かないわたしを不思議そうに覗きこみながら平くんがお冷をグラスに注いでいる。ハッと我に返った。

「ご、ごめん。わたしが行くから」

わたしは平くんの用意したお冷を半ば奪うようにして、それをトレイに乗せた。久遠さんは窓際の一番手前の席に座った。一つ深呼吸をして歩み寄る。どうしてこんなに緊張するのか自分でもわからない。

「い、いらつしゃいませ」

小さく声をかけてお冷を置くと、久遠さんが顔を上げ、にっこりと笑った。アイドル顔負けの笑顔だ。

「ごめん、突然」

「いえ、別に……でも、どうして？」

「大和にここでバイトしてらって聞いて。九時までなんだろ？ そ

れまで待っててもいいかな。一緒に帰ろうよ」

「へっ?」

思わず変な返しになってしまった。久遠さんはクスツと小さく笑い声を洩らす。

「大丈夫、大和は了解済みだよ。オレも大和んちに戻るから、ついで」

そうか、久遠さん大和の家に行くのか。そういうことなら断るのも逆に変なのかもしれない。わたしはコクリと頷いた。そのまま戻ろうとしたわたしの背中に「カフェオレ」と久遠さんの声がかかる。すっかり注文のこと忘れていた……。

「なんだ、里珠ちゃんの知り合いだったの?」

戻ったわたしに夕子さんが興味深々のキラキラした目を向ける。

それでも注文を告げるときびきびと手を動かし始めた。

「もしかして新しい彼氏?」

「え、雨宮さん、カレシと別れたんですか?」

平くんまでひそひそと話に入ってくる。わたしは眉を顰めて同じようにひそひそと言葉を返した。

「別れてません。あのお客さんは彼の友達」

「なんだ、そうなんすか。あ。ありがとございました」

客の一人が席を立ったのを見て、平くんはすぐにレジの方へ向かった。いつもながら機敏だ。

「里珠ちゃんの彼もカッコいいけど、あの人もすごくイイね。類は友を呼ぶっていうのかな」

夕子さんの言葉に苦笑い。たしかに二人とも美男子だとは思っけど。

「それはちょっと意味が違うと思う……」
「そっか　ハイ、カフェオレ」

夕子さんがカップをカウンターに置いた。それを受け取って久遠さんのもとへ運ぶ。

「お待たせいたしました」
「あ。ありがとう」

久遠さんは窓の外からわたしに視線を移し、目を細めて笑った。

あ、また。
あの胸の痛みが甦る。わたしは慌てて目を逸らし、軽く頭を下げて席を離れた。

どうしてだろう「懐かしすぎて」胸が痛い。息が詰まるような感じがした。その理由がわからないことが、どうしようもなく不安だった。

一緒に帰ることを承諾したの、ちょっと失敗したかもしれない。

*

*

*

店からやや離れたところのガードレールの上に、久遠さんは足を投げ出して腰かけていた。街灯の下その姿はまるでスポットライトを浴びているようにキレイで、思わず見惚れてしまった。久遠さん、足長い。

ボーっとしていたわたしに気付いて久遠さんが立ち上がる。わたしは慌てて駆け寄った。

「ご、ごめんなさい、お待たせしました！」

「いや、大丈夫。そんなに待ってないから。さ、いこ」

久遠さんはゆっくりと歩き出した。わたしは一瞬迷ったものの、久遠さんの右隣に並んだ。後ろをついていくのも変だろう。

久遠さんはわたしより頭一つ分ぐらい背が高かった。大和よりも少しだけ高いかな……そんなことを思いながらちらりと横顔を窺った。顎の右側にわりと目立つほくろがあるのに気付きハツとする。

「あ………！」

何かがちらりと頭をよぎった。でも、道路を走る車が鳴らしたけたたましいクラクションのせいで、頭の中の何かは掴む間もなく散っていく。もう何も残っていない。

「君とゆっくり話がしたかったんだ」

前置きも何もなく、久遠さんがポツリと話し始めた。

「大和にそう言ったら、バイト先を教えてください。急に押しかけて悪いと思ってる」

「い、いえ………」

一体どう答えればいいのかわからない。
そもそも、わたしと話がしたかったということ自体が理解できなかった。それを大和が了承するとか……何それ。わたしの頭は混乱の一手手前だ。

「大和っていい男だよな」

これまた話が飛ぶ。全く話の方向性が見えないまま、わたしは曖昧に頷いた。

「ええ、まあ……？」

久遠さんはクスツ笑う。

「優しいし、家は金持ちだしな。里珠は幸せだな」

わたしは思わず足を止めた。止めずにはいらなかった。一、二、三歩先に進んで久遠さんが怪訝そうに振り返る。

「どうした？」

「今、久遠さん」

『里珠』って。わたしのことを「里珠」と名前で呼んだ。当たり前のようにサラリと。

久遠さんはようやくそのことに思い当たったようで、「あー」と口許に手をやった。

「悪い！ 大和たちがそう呼んでたからつい。会ったばかりなのにいくらなんでも馴れ馴れしいよな。不愉快にさせたのならごめん」
「い、いえ……」

別に不愉快なんかではない。それどころかあまりにも違和感がなさすぎる。そんな自分の感覚がまた不思議でたまらない。なんだろう、これ。

「別に名前で呼んでもらっても構わないですけど」

戸惑いながらも、気が付けばそんなことを口走っていた。久遠さんの顔が嬉しそうに晴れる。子どものような無邪気な表情。

「そっか。よかった。それじゃさ、里珠もオレの事名前で呼んでくれよ。その方がしっくりくる。ほれ、呼んでみ？」

そう催促されて、わたしは勇気を出して久遠さんの名前を口にした。

「葵、さん？」

「さん、いらぬい」

「え、でも……」

「いらぬいって。オレたち、同じ年だぜ？」

これには少し驚いた。大和の友達というから、てっきり年上だと思っていた。でも同じ年なら……。

「じゃ、じゃあ遠慮なく 葵」

「よし……」

何が「よし」なのかはわからないけれど、久遠さん もとい、葵は満足したように再び歩き出した。その足取りがさっきまでよりも軽くなっているように見えるのはたぶん気のせいじゃないだろう。

だって、わたしも同じだったから。

一度打ち解ければ、葵はとても話し易い人だった。何気ない話だが途切れることなく会話が続く。初めのうちを感じていた戸惑いも不思議な「懐かしさ」も、話しているうちにゆっくりと薄れていった。

大きな幹線道路を横切る横断歩道を信号待ちする。さっき赤に変わったばかりだからあと三分は待たないといけない。

遠くの方から救急車のサイレンの音が聞こえてきた。それは確実に近付いてきている。恐らくこの前を通るのだろう。思わず、ぎゅっと両腕を抱いた。

「どうした？」

葵の声かけに、慌てて笑顔を作って首を振った。

「何でもないよ」

「そう？」

どこか納得いかないように葵が首を傾げる。そのタイミングで救急車がわたしたちの前を通り過ぎた。固く目を閉じてしまったのはほとんど無意識だった。

「里珠。信号変わるよ」

葵の声に目を開けた。周りの人が歩き始める。信号が青に変わったのだ。救急車の音はとうに遠ざかってもうほとんど聞こえなくなっていた。

「う、ごめん、行こっか」
「もしかして、救急車が駄目とか？」

横断歩道に一步踏み出そうとしたわたしを、葵の言葉が止めた。葵を振り返ると、これ以上ないくらい真剣な目がそこにあつた。

「里珠、救急車が苦手？」

ズバリと言い当てられ、わたしは力なく笑った。

「うん」

横断歩道を渡るのは諦めた。観念して葵を見上げる。

「救急車がだめというか、サイレンの音が苦手。どうしてだか気分悪くなってくるの」

「その原因は？」

「わかんない　あまり考えたことない」

本当にそうなのだ。苦手なものは苦手、ただそれだけのことだと思っていた。苦手になった原因など考えたことはない。

信号が再び変わり、車が動き出した。車の走行音で辺りがまた煩くなる。

「オレも、救急車は苦手だ。サイレンの音も」

「え？」

思わず目を丸くすると葵が小さく息をついた。

「だけど、オレはちゃんと原因わかってるよ」

興味をそそられる言葉だ。つい身を乗り出してしまった。

「原因、何？」

「知りたい？」

「う、うん、知りたい」

「本当の本当に知りたい？」

「知りたい！」

もしかして、わたしのサイレン嫌いの原因も同じかもしれないし。そう思いながら期待を込めて葵の言葉を待つ。

ややあつて、葵が口を開いた。

「　　だめ。教えない」

意地悪そうに小さく舌を出して笑う葵。一気に気が抜けた。

「うわぁひどい。期待させといて！」

怒ったふりをして葵の手を軽く叩こうとした　その時。

「きゃッ！」

「うわー！」

『バチッ』という何か弾けるような音と共に、手に鋭い痛みのようなものが走った。突然のことにわたしも葵もつい声を上げてしまった。

「な、何、静電気？」

そう、今は冬場によく起きる静電気だ。たまにドアノブなどを触れる時に起きたりするあの感覚によく似ていた。あれよりも少しだけシヨックを強く感じた感じだ。

「びっくりした……」

「ああ……」

葵もまだ呆けたように腕をさすっている。わたしが叩こうとした腕だ。その腕にわたしが触れた瞬間に静電気が起きたらしい。

「驚いたね……今日そんなに乾燥してんのかな」

「だろうな」

二人で顔を見合わせて情けなく笑いあった。

この「静電気」が今後のわたしたちを苦しめることになるとは、この時のわたしには知る由もなかった。

大和の家の前で葵とは別れた。この時間に家を訪ねると言うことは、葵は今夜は大和の家に泊るのだろう。

「里珠は寄っていかないの？」と訊かれ、苦笑いしてしまった。付き合ってるとはいえ、そんなにいつもベタベタしてる訳じゃない。わたしがそう言うのと、葵は少しだけ意外そうな顔をしていた。そんな顔をされる方がわたしとしては意外だ。こんな夜に男の人の家を訪ねるなんてことやってたら、親からはすぐに交際を反対されてしまう。いくら幼なじみの大和でも いや、相手が大和だからこそ、変に家族とこじれることは避けたかった。

なんて、そんなこといちいち葵には説明しなかったし、葵も何も訊いてはこなかったけれど。

家に帰ると、お母さんとお父さんが居間でテレビを見ながらビールを飲みかわしていた。いつもの光景だ。うちの両親は子どももの目から見ても仲がよらしい。お母さんがにこやかにわたしを迎えた。

「おかえり、里珠。お疲れさまー」

「ただいまー。お父さん、おかえり」

「おう。ただいま。どうだ、お前も一杯？」

すでにちよつとほろ酔い加減のお父さん、未成年のわたしにも平気でビールを勧めてくる。それもわりといつものことだ。いつもならグラス一杯ぐらいはお付き合いするのだけど、今日はそんな気分じゃない。丁重にお断りすることにしよう。

「ごめん。疲れたからやめとく。風呂入って寝るねー」

「おお、そうか。じゃあ、ゆっくり休め」
「ありがとう」

わたしはそのまま居間を出しようとして、ふと思いついて足を止めた。

「あ、そうだ」

二人が同時に振り返る。

「なんだ？」

「どうしたの？」

「あのさ、わたしの救急車嫌いって何か理由があったっけ？」

軽く……本当に軽く訊いてみたつもりだったのだけど。

ふたりの笑顔がピタリと貼りついたように動かなくなった。その反応に首を傾げた時、こめかみに、ズキッと軽い痛みが走った。

『これ以上は訊くのを止めた方がいい』
『何かがそう訴えかける。』

「やっぱり、なんでもない」

そう言ったのはほとんど反射的なものだった。両親がようやくハッとしたように表情を動かした。

「里珠、どうしたの、突然？」

お母さんは穏やかな笑顔を作り平静を装ってはいるけれど、その内心の動揺がなぜか今のわたしには手に取るようにわかってしまった。

お母さん 怯えている？

ちらりとお父さんを見ると、さっきまでのご機嫌そうな笑顔はすっかり消え、むっとりとした顔でビールを口に運んでいる。

急激に動悸が激しくなった。嫌な感じがする。

わたしはもう一度お母さんに目を戻して、笑って首を振った。

「うっん、なんでもないよ。ごめんね」

「あ、里珠！？」

お母さんの呼びとめる声にも応えずそのままバタバタと居間を出た。部屋への階段を駆けあがりながら、胸をぐっと押さえた。

嫌だ、嫌な感じだ。

お母さんの怯えたような反応も、お父さんの不機嫌も、わたしの些細な質問のせいだ。

『救急車嫌いって理由があつたっけ？』

ただそれだけの質問。

だけど、両親にとっては「些細な」質問ではなかったのかもしれない。

何故？ どうして？ 頭を回る疑問、そして混乱。

自室に入りドアを閉めて、すぐに何度か深呼吸をした。それでもなかなか動悸は治まらなかった。

葵にも話した通り、わたしは自分の救急車嫌いの理由をこれまで深く考えたことはなかった。当然、両親にも訊いてみたことはない。だけど、今思えばそれさえも不思議に思えてきた。何故考えなかつ

たのだろう？ 何故訊かなかったのだろう？

もしかして、考えなかったのではなく、考えられなかったのかもしれない。訊かなかったのではなく、訊けなかったのかもしれない。

『オレも救急車は苦手だ…… ちゃんと原因はわかっているよ』

唐突に葵の言葉を思い出した。そのとたん、こめかみが鋭く痛み出した。さつきも感じた痛みだ。でも今度はさつきよりも激しく、長く続く。

「っ……」

わたしは頭を抱えるようにしてしゃがみこんだ。
痛い。頭が割れるように痛い……！

「な、に、これ」

得体のしれない頭痛に恐怖すら覚える。その時、肩から提げたまのバックが振動を伝えてきた。携帯電話だ。

「っ……」

わたしは痛みには耐えながらバッグの中からそれを取り出した。

大和からの着信 そう確認したとたん、それまでの頭痛が嘘のようにスーツと和らいでいった。意識が痛みよりも携帯電話に向いたせいなのかもしれない。よくわからないけれど、とりあえず頭痛が治まりつつあることにホッとした。

「 もし、もし……」

『もしもし、里珠？』

わたしの名を呼ぶ大和の穏やかな低温が耳に心地いい。思わずため息が漏れた。そしてそれはきつちり向こう側にも伝わってしまったようだ。

『どうした？ 何かあったのか？』

心配そうな口調に変わる大和。わたしは小さく首を振った。大和から見えるはずはないのだけど、つい。

「ううん、なんでもない。頭が少し痛くて」

話しながらベッドに移動して、そのままゴロンと仰向けになった。それだけでも体が楽になる。

『頭痛いって、大丈夫なのか？』

「うん。平気。大和の声聞いたら治まった。薬より効くかも」

『そりゃ……お役に立てて何より』

どこか間の抜けた返事がおかしくて、つい声を立てて笑ってしまった。どうやら大和も笑っているようだ。こんなちょっとしたことが幸せだったりする。

『でも本当に大丈夫なのか？』

それでも心配そうに尋ねてくる大和に、わたしははっきり「うん」と答えた。嘘じゃなく頭痛はすっかり消えてしまった。

「もう大丈夫。ところで、何か用だった？」

こんな時間に彼から電話があるのは実は珍しい。付き合っているにしては少し変かもかもしれないけれど、大和とはあまり電話で話すことはないのだ。家が近いせいかもしれないし、お互い電話で話すのがあまり得意じゃないせいもある。

『いや、別に用じゃないけど……』

大和は一度言い淀むように言葉を切ったけれど、すぐに続けた。

『さつき、葵と一緒に帰って来ただろ？ どうだった？』

「え？」

急なその言葉に、一瞬目が点になってしまった。「どうだった？」の質問の意図が掴めない。

『どづつて……どづつて……どづつて……どづつて……どづつて……』

『』

戸惑いを隠せないわたしに返ってきたのは、どこか重い沈黙。たつぷり五秒……十秒。さすがに不安になった。

「や、大和？」

『いや……ごめん。なんでもない』

大和の声は小さかったが、とりあえず返事があったことに安堵する。それでもなんとなく気まずい気がして、わたしはあえて明るい声を出した。

「別に謝って貰わなくてもいいけど。何？ 葵がどうかしたの？」

『……葵、か』

ポツリと返された眩きが、わたしが「葵」と呼び捨てたことに対してのものだと気付き、慌てた。

「あ、あの、葵が　あの人がそう呼んでいいって言うから、つい。同じ年だって言ってたし……た、他意はないよ？」

『わかってる。別に、いいよ』

小さく笑う気配がした。その柔らかな気配はいつもの大和のもの。わたしはホッと息をついた。それにしても……。

「ねえ、どうしたの、大和？　変じゃ　」

『なあ、里珠』

わたしの言葉を大和はやんわりと遮った。

「な、何？」

『……好きだよ』

一瞬、心臓が止まるかと思った。それぐらい驚いてしまった。耳に当てた携帯電話から聞こえたそれは、まるで耳元でささやかれたかのように聞こえたから。

一拍置いて、ようやく胸がドキドキと騒ぎ出した。体中の血が顔に集まって来ているような気がする。

「な、なに、急に……！」

『なんだろうな、急に言いたくなかった。好きだよ、里珠』

照れた様子もない真っ直ぐな大和の言葉。あまりにも心に沁みて、もう何も言えなくなってしまった。クスクスと大和が笑う。

『やっぱり、顔見て言いたいな。なあ、里珠、今からウチに来る？』
「ええっ？」

驚き過ぎて思わずガバツと身を起こしてしまった。その様子が見えている訳もないのに、タイミング良く大和が笑い声を上げた。

『声でかいよ、里珠。冗談だよ、冗談。とりあえず、ウチには今葵いるから、来てもらっても逆に困るし』

まだ大和の声には笑いが含まれている。わたしはドキドキしっぱなしの心臓を落ち着かせるように、大仰なため息をついた。

「ま、まったくもう、人をからかって」

『別にからかつてはいないけどね。今度はちゃんと顔見て言う。と
いうことで、また明日な。夜更かしなんかしないで早く寝るよ』

「やだな、大和。お父さんみたい。わかってるよ。また明日ね」

バイバイ、と言って電話を切った。自分の声が聞こえなくなった部屋は、当たり前前だけどしんと静まり返っていた。

一つ大きく息をつき、再びベッドに横になる。

……やっぱり大和、ちょっと変だった。

好きだ、とか言われたことじゃない。大和はこれまでも時々そういうことを口にする。わたしはその度にドキドキさせられて、未だに慣れないでいるのだけだ。

だけど、変だと思った原因はそれじゃない。

「大和、葵を気にしてた……？」

わたしが二人で一緒に帰ったから？ だけどそれは大和も了承済みのことだったはず。だったらなぜわざわざ電話かけてきたのだろう。まるで、葵とのこと探るみたいだった。

そこまで考えて、わたしはブンブンと頭を振った。大和が葵とわたしのことを探る？ そんなこと必要ない。意味がない。でも、だけど……。

「……あーもうっ！」

わたしはゴロゴロとベッドの上を転がった。なんだかモヤモヤとして気分がまつたくスッキリしない。

今日はずっとこんな感じだ。ずっと何かを考え続けている。そして、その全てが「久遠葵」という人に関係することだ。

初対面の時の、妃実ちゃんへの反応。

突然バイト先にやってきた葵。

救急車のこと。両親の反応。

そして、大和からの電話。

脳裏に、葵の綺麗な顔が浮かんだ。「里珠」とわたしを呼ぶ声が甦った。懐かしさを感じる眼差しを思い出した。

「ああ、また……」

胸が痛い セツナイ。

その感情を持って余し、わたしはギョツと固く目を閉じた。

葵。あなたは一体誰ですか。

ただその答えが知りたかった。

ピアノ、好き？

ううん好きじゃない。だって、全然うまく弾けないし、練習も好きじゃないし。

じゃあ、辞めるの？

辞め、ない。

どうして？

だって……。

『だって』

どこか遠くに感じていた会話がだんだんと近くなって、いつの間にか自分の声と重なっていた。ふと気付けば、わたしの隣には不思議そうな顔で首を傾げるあの人がいた。よく知った、大好きな人。その人がじつとわたしの答えを待っている。

わたしは俯いて声を振り絞る。

『だって、もうちょっと上手になったら、一緒に弾ける、かもしれない、し』

少しだけ間をおいて、彼が言った。

『じゃあ、頼んでみようよ。今度の発表会、二人で連弾させて下さいって』

驚いて顔を上げた。彼はただニコニコと笑っている。大好きなそ

の笑顔にもう何も言えなくなった。

嬉しさと恥ずかしさと、何かわからないポカポカとしたものが胸に込み上げて来て。

ああ、なんて幸せなんだろう。

そんなことを思ったりした。

そんな懐かしい夢を見た。

懐かしすぎて、目が覚めてからもしばらくその余韻に浸っていたわたしは、ゆっくりと瞬きをしてようやく体を起こした。

それでも、まだ夢の「残り香」が体の周りに纏わりついているような感じだ。けっして悪い気はしない。だけど、懐かしすぎて「悲しい」「そんな気がした。」

「……まあいつか」

気持ちを紛らすように、大きく欠伸交じりの伸びをした。朝から物思いにふけっている時間はない。

「よいしょー!」

わたしは威勢よく声をあげて、ベッドから下りた。

*

*

*

駆け寄るわたしに気付き、大和が片手を上げる。文句のつけようのない爽やかな笑顔だ。

「おはよう」

「おはよう！ 大和」

わたしたちは、お互いの講義の時間が合う日はたいてい一緒に行くことにしている。とくに約束はしていないけれどいつの間にかそれが当たり前のような感じになっていた。

大和の家から駅までの十五分、通り慣れた道を二人で肩を並べて歩く。この時間がわたしは大好きだった。

「あ、そうだ。昨日あ」

葵、と名前を出そうとして、思いとどまった。昨日の電話を思い出し、迂闊に口にはいけない気がしたのだ。大和はそんなわたしに少しだけ苦笑する。

「葵？」

優しく首を傾げて問いかけてくる大和に、わたしはためらいつつ頷いた。大和は特に気にするふうでもなく、いつもの笑顔を浮かべている。

「葵ね、しばらくウチに泊ることになったから」

「えっ！」

「いろいろ事情があるみたいで。だから、里珠ともこの先顔合わせることあるかもしれないけど」

大和が改めてわたしに目を向けた。

「その時は仲良くしてやって」
「え……うん」

自分の彼氏に他の男の人と「仲良くして」と言われるのもなんだか微妙な感じだ。もちろん、大和は変な意味で言ったわけではないのだからけど。

「じゃあ、あの人まだ大和の家にいるの？」
「いや。今朝はもうどこかに出かけたみたいだな　なに、あいつのこと気になる？」

冗談っぽく顔を覗きこんでくる大和に、わたしは慌てて首を振った。

「べ、別にそういうわけじゃ」

焦るわたしの言葉を遮るように、ポン、と頭の上に手が置かれた。

「ごめん、じょーだん」
「！」

大和がわたしの頭を抱きかかえるように自らの体に寄せる。ふわりと大和の匂いに包まれ、一瞬で頭に血が上ってしまった。

「ちょ、やめ……朝からっ！　か、髪が乱れるから　！」
「なに、じゃあ夜だったら乱してもいいの？」

クスクスと笑う大和。ますます慌ててしまった。

「や、大和っ！」

「ハイハイ、照れ屋だなあ」

おまけのように頭を一度軽く叩いて、大和はわたしから手を離れた。わたしは髪を整えるふりをして必死に動揺を抑える。

心臓がバクバクしていた。

「里珠、行くよ？」

わたしの動揺なんて気にするでもなく、大和がのんびりと振り返る。大和にとつて、あの程度のスキンシップはきつとどうってことないのだろう。こういう時、一年の年の差 経験の差を感じる。大和がとても大人びて見えてしまう。わたしが子どもなだけかもしれないけれど。

気を取り直して大和の隣に並ぶと、大和はにっこりと笑った。

大和はとても整った顔立ちをしている。切れ長の奥二重の目が笑うと三日月形に垂れて、精悍な顔が一気に優しくになる。その優しい笑顔にわたしはいつも見惚れてしまう。

不思議だ。大和とは物心ついた時から一緒にいるのに、未だにその人の姿を見てドキドキしているのだから。それはやっぱり、大和がわたしの初恋の人だからだろうか。そう、初恋の。

「あ！」

つい声を上げてしまった。大和が驚いたように顔を向けた。

「何、突然？」

「ごめん、急に思い出して。今日ね、夢見たんだ」

「夢？」

大和が首を傾げる。わたしは勢い込んで続けた。

「そう。子どもの頃の大和とわたしの夢。連弾しようねーっていう頃の」

「あー」

大和は戸惑ったように笑いながら空を仰いだ。子どもの頃の話をする、大和は時々こんな風に戸惑ったような困ったような表情をする。照れ臭いのだろうか。

「なんかすっごい懐かしかったなー。あの頃からわたし、大和のことが」

好きだったんだよ、と続けようとしたけど続かなかった。照れたからとかそういうことではなく、驚いて言葉が出なかったのだ。何気なく向けた視線の先に、あの人がいたから。

つい足を止めてしまったわたしに、大和も不思議そうにその方向に目を向ける。

「 葵」

大和がポツリとその人の名を呟いた。

右側前方にある小さな通りの横断歩道の前にその人は立っていた。斜め後ろからしか見えないが確かに葵だ。何をするでもなくただ立っている。信号待ちをしているのではない。その信号は既に青だ。ポツリと立っているのは葵だけ。通りすぎる人が訝しげに彼を振り返っていく。

「な……何やってるの?」

「さあ」

大和は葵のいる横断歩道とは反対の方にサツと向きを変えた。駅に行くには確かにそちらに曲がるのだけど、その素っ気ない態度が気になった。

「ね、ねえ、大和。声かけないの？」

「いいよ、子どもじゃあるまいし。ほっとけ」

「で、でも」

「里珠、いいから」

柔らかに、それでも反論を許さない調子で大和が言う。スタスタと先を歩く大和にもう何も言えなくなった。

確かに葵は子どもじゃない。いちいち声かける必要はないのかもしれない。だけど気になる。葵のことも、葵を気に留めようという大和のことも。

大和はわたしに歩調を合わせてはいるけど、一度も振り返ろうとしない。それが逆に気になった。

チラリと後ろを振り返ってみた。

葵は同じ場所にただじっと立ち尽くしている。

その目は前を流れる車の列を見つめているのか、それとも別の何かを見ているのかわたしにはわからない。

もしかしたら、大和はわかっていてのかもしれない。どこか頑なな大和の横顔を見ながら、なぜかそんな気がした。

*

*

*

バイトが終わり、店を出てから携帯を確認めると、大和からのメ

ールが入っていた。

昨日の煮物のお礼と、タッパーを返しにわたしの家まで一緒に行くからバイトの帰りに家に寄って、という内容だった。

歩きながら承諾の旨の返事を簡単に送ると、すぐに「待ってる」と返ってくる。大和は今日はバイトなどもない日だから家にいるのだろう。

大和は、我が家から食べ物などを貰うと、後日必ず直接お母さんにお礼を言いに来る。わたしに言付けるだけでも構わないのにそういう礼儀は忘れない。大和にしてみればそれは当然のことのようで、特にうちの親に気に入られたいとかそういうつもりでもなさそう。まあ、子どもの頃から知ってるし、今さら気に入られるも何も無いのだろうけど。

そんなことをぼんやり考えながら歩いているうちに、ふと昨日の帰り道のことを思い出した。

昨日はこの道を葵と一緒に歩いたのだ。

葵 彼は不思議な人だ。昨日会ったばかりなのに、葵のことはずっと前からの知り合いのように思える。話をして打ち解けたせいだろうか。

葵には初対面の人特有の緊張感をなぜか感じなかった。わたしにしてみれば、会ったその日に名前を呼び捨てにするなんて普通では考えられないことだ。今思えば抵抗感がなかったのが不思議でならない。

葵のことは何も知らない。昨日の会話はほとんど世間話のようなもので、個人的なことは全く話さなかった。もつといろいろ聞けばよかったかな、と今になって思う。

こんなふうに考え込むぐらいなら、本人にいろいろ聞いてスッキリした方が良かったような気がする。大学はどこなのかとか大和と

はどんな友達なのかとか、本当は妃実ちゃんとも知り合いなんじゃないかとか。

聞きたいことはもつとある。

どうしてわたしはあなたを見て懐かしい気持ちになるんですか？

あなたを見ると胸が痛くなるのはなぜですか？

「あなたは誰ですか」　そう聞いたら彼はどう答えるだろう。

そう考えて、わたしは一人失笑した。「あなたは誰ですか」なんてずいぶん曖昧な質問だ。それを葵に聞きたいと思っっている自分がおかしかった。

「あ………」

小さな通りの横断歩道を渡ろうとしてわたしは思わず足を止めた。

この横断歩道、今朝葵を見かけた横断歩道だ。

葵はここで一体何をしていたのだろう。

首を傾げつつ、わたしにとっては何も変わったところのないその横断歩道を渡る。渡ってしまったからもう一度振り返ってみなければ、やっぱり特に何があるわけでもなかった。

今度会ったら聞いてみようかな　そう思いながら歩を進める。その時に道の横にある児童公園に目をやったのは無意識だったのだけど。

「え？」

わたしはつい目を疑った。公園入口付近の銀杏の木の下に、まさに今まで考えていたその人がいたのだ。

「葵？」

わたしは思わずそこへ駆け寄った。葵はとうにわたしのことには気付いていたようで特に驚いた様子は見せなかった。

「おかえり。バイト帰り？」

「うん。葵は何やってるの？」

こんな小さな児童公園、夜に来るような所ではない。こんな人気がない場所で木に寄りかかって一体何をしているのだろう。

「見てたんだ」

葵はそう言っただけで視線をどこかへ動かした。

「見てた？」

わたしは葵の視線を辿る。辿って、思わず息を飲んだ。葵が見ていたのは、さっきわたしが渡ってきた横断歩道だった。

「見てたって、あの横断歩道？」

「そう」

視線を動かさず答えた葵の顔は、どこか悲しげに見えた。その表情に一瞬ためらいを覚えたが、わたしは思い切って口にした。

「葵、今朝もあそこ見てたよね？ あの横断歩道がどうかしたの？」

葵がゆっくりとわたしを見た。

「あそこは、大事なものを失くした場所だ」
「大事なもの？」

葵は目を閉じ小さく微笑んだ。

「そう。とても大事なものを」

わたしは言葉を失ってしまった。葵の顔が、微笑んでいるのにまるで泣きそうに見えたから。

その痛々しい表情が胸に突き刺さった。何か言葉をかけたいのだけど、何を言っているかわからない。

葵が目を開けた。もう泣きそうな顔はしていない。だけど、そこから伝わってくる痛々しさは変わっていないかった。

「里珠は憶えていないんだな」

微笑みを消し、葵が言った。その言葉に心臓がドクンと激しくなった。意味がわからず戸惑う。

「え……？ なに、葵」

問い返したわたしに、葵は一度目よりもやや強い口調で答えた。

「里珠は本当に何も憶えていないのか？」

「憶えていない……わたしが？」

言葉を繰り返すと動悸が一段と速まった。同時に、チリリとこめかみが痛み出した。

葵が被せるように言葉を放つ。

「本当に全部忘れてしまったんだな。あの時のことも、オレのこと
も」

「え……忘れ……？」

全部？ あの時？ オレの 葵のこと？ 何？

わたしはすっかり混乱していた。わけがわからなかった。

それよりも、頭が 頭がひどく痛い。

締め付けられるように痛むこめかみを、わたしはギュツと手で押
さえた。

痛い 苦しい。

頭の痛みと同時に動悸がこれ以上ないほど激しくなった。全速力
で走つたみたいに苦しくて、息遣いが荒くなる。立っていられなく
なりそうだった。

「葵……」

助けを求めるように葵を見た。葵は自分も苦しそうな顔をしてわ
たしを見ていた。だけど、手を差し伸べてはくれない。

痛くて苦しくて、何が何だかわからなくなった。

もう何も考えられない。

「里珠！」

突然介入してきた声に、わたしは辛うじて意識を保った。

「なにやってる！」

聞きなれた声 大和？

「里珠、大丈夫か？」

走ってきたのか、大和の息遣いは微かに荒かった。傍に来てすぐにわたしの腕を掴むように体を支えてくれた。

ああ、大和が来てくれた……それだけで気持ちグッと楽になった気がした。それでも頭痛は和らぐことはなく、息苦しさも変わらなかった。大和の顔を見上げることすらできない。

「里珠……葵」

大和の声が低くなった。

「里珠に何を言った？」

少しの間をおいて、淡々とした葵の声がした。

「……本当にオレを忘れたのか、と」

次の瞬間、バチンと濁った音がした。

大和が叩いたのかな……なんとなくぼんやりとそう思った。なんだか現実感がない。

頭痛も息苦しさも感じなくなってきて、かわりに、どこかふわりとした浮遊感みたいなものを感じた。

「里珠には　まだ　あれほど　」

葵に向って話している大和の声がだんだん遠くなっていく。

こんなに怒ったような大和の声、これまで聞いたことないな……そう思いながら、わたしは目を閉じた。

「里珠！？」

大丈夫　そう答えたけれど、それはもう言葉にはならなかった
かもしれない。

目が覚めた時、まず一番に目に入ったのは大和の心配そうな顔。そしてその横にはなぜか妃実ちゃんがいた。

「里珠。気が付いたか？」

大和がホツとしたように小さな声でそう言って、わたしの頬にそつと手を触れた。少しだけひんやりとしたその感触に、体中の感覚が戻っていく気がする。何度か瞬きをしながら周囲を見回して、そこが大和の家のリビングだと気付いた。わたしが寝ているのは部屋に置いてあるソファアールだ。

なぜ、ここにいるのだろうか……まったく状況がわからない。その戸惑いが顔に出ていたのだろうか、大和が答えをくれた。

「俺がここに運んだんだよ」

その言葉に目を丸くすると、大和は気遣うように微笑んだ。

「里珠、外で気を失ったんだ。妃実香には手伝いに来てもらった」

「さつき大和から連絡を受けてね。いきなり里珠の家に連絡したら、おばさんたちを心配させちゃうだろうから」

妃実ちゃんがわたしの顔を覗き込むようにして笑った。

「里珠んちには私が電話しておいたから心配しないで。久し振りに三人で昔話に花が咲いて、って言ったら、おばさん笑ってたわ」

口調は軽いけれど、その顔にはやっぱりわたしを気遣う色が浮かんでいる。

大和も妃実ちゃんも心からわたしを心配してくれているのがわかる。

それも当たり前かもしれない。外でいきなり気を失ったっていうんだから。

「面倒かけてごめん……でも、なんでわたし……」

自分の身に一体何が起きたのか　混乱しながらもその時の事を思い出そうとした。その途端、頭がズキン、と痛んだ。一瞬顔が苦痛に歪む。大和がわたしの額に手を乗せた。

「無理するな」

労わるような声に思わずそのまま目を閉じてしまいそうになる。だけど、わたしは小さく首を振ってやんわりと大和の手を外した。

「大丈夫……起きるね」

頭の痛みよりも、今の自分の状況がわからない方が嫌だった。このまま黙って横になっている気分ではない。妃実ちゃんがわたしが体を起こすのを手伝ってくれた。

「ありがとう」

「大丈夫？　どっか痛いところない？」

まるで子どもに向って話すような口調の妃実ちゃんに、つい笑みがこぼれてしまった。

「やだ。妃実ちゃんが優しい」

「ちよつとあんたね。ずいぶん失礼じゃないの」

そう笑って言う口調もやっぱりいつもよりも柔らかかだ。

「だって本当のことだもん」

声を出して笑うと、少しだけ気分も落ち着いて来た。わたしは改めて大和と妃実ちゃんを見返した。

「ふたりとも心配かけてごめん。だけど、わたし一体どうしたのかな……よく思い出せないんだけど」

大和と妃実ちゃんが顔を見合わせる。無言だったけど、何かの確認をするかのように頷き合うと、突然大和が部屋の外に向かって声をかけた。

「葵。入れよ」

その名前についビクリとしてしまった。他に人がいることを考えていなかった。そういえば、葵は大和の家に泊っていると聞いていたっけ。

居間の入り口から葵が姿を見せた。葵はゆっくりとわたしたちの方へ近付いたが、ある程度の距離を置いたところで止まった。

「……体、大丈夫か？」

そう言ってわたしに目を向けた葵は、自分の方が傷付いたような表情をしていた。顔色も悪い。

「うん、平気……葵は？」

ついそう聞き返してしまった。葵は驚いたように眉を上げたが、すぐに小さく首を振った。

「オレは全然……ごめんな」

葵が突然頭を下げた。わたしは驚いてどう反応すればいいのかわからず、思わず隣に座っている大和に目を向けてしまった。大和がわたしを探るように見返した。

「里珠は葵と話をしている時に気を失ったんだよ。覚えてない？」
「え？」

葵を見やると、わたしの答えを待つかのように、じっとこちらを見つめていた。

「あ……」

その目を見ているうちに、少しずつその時の事が甦ってきた。

ああ、そうだった。わたしは葵と話していたのだ。

夜の公園。

木に寄りかかって立っていた葵に、バイト帰りだったわたしが話しかけた。

葵は何かを見ていた。何か 横断歩道だ。

葵は、あの横断歩道を「大事なものを失くした場所だ」と言って、そして……そして？

「痛……！」

またあの頭の痛みが襲ってきた。頭を抱えたわたしの肩を、大和がぎゅっと抱き寄せてくれる。

「大丈夫か？ 無理なら思い出さなくてもいい」

「思い……出す……？」

何かが琴線に触れた。

頭の中に声が響いて来た。

『本当にオレのことを忘れたのか』

これは誰の声？ 葵？

答えるかのように、葵の目がわたしを真っ直ぐに見つめている。苦しそうな顔をして。

『里珠は本当に何も憶えていないのか？』

そう問いかけてきた葵の声をはつきりと思い出した。その時の葵も、今と同じように苦しそうな顔をしていた。

「わたしが……葵のことを忘れたの？」

わたしの言葉に、大和の体がピクリと動き、肩を抱いてくれる手の力が少しだけ強くなった。そして、反対側の隣に座った妃実ちゃんが、膝の上に置いたわたしの手をそっと握り締めた。

その行動の意味はわからない。だけど、二人の体温はなぜか心強

かった。

「葵は、わたしが全部忘れてしまった、って言った」

頭が脈動に合わせてギリギリと痛んだけど、大和と妃実ちゃんのぬくもりがそれを和らげてくれていている気がした。

葵と話をしている時は、この痛みに負けてわたしは意識を手放してしまったのだと、今になって理解した。

この頭痛は、葵の言葉によってもたらされたもの。

だけど、知りたい。

今は痛みよりも、何かに急ぎたてられるようなその感覚の方が強かった。

葵の言葉の意味をちゃんと知りたい。

「わたしは何を忘れたの？」

葵の目が揺らいだ。その目が大和に向けられる。

大和がそれに応えてゆつくりと頷いた。そして、わたしから身体を離すと両肩を掴んで真剣な顔で目を覗き込んできた。

「里珠。この話は里珠にとってかなりショックなものだと思う。また気を失うほどのことが里珠を襲うかもしれない。それぐらいの覚悟が必要だよ」

あえて淡々と話したであろう大和の言葉に、つい怯んでしまった。気を失うほどのショックなもの。

あの痛みと苦しみは思い出すだけでもゾツとする。それがまた襲ってくるかもしれない。逃げたいと思ってしまう。

それでも、それ以上に……。

「わたしは知りたいの」

わたしはきっぱりと答えた。大和はそれをじっと見つめゆっくりと頷いた。妃実ちゃんが握っていたわたしの手をポンポンと叩いた。

「大丈夫よ、里珠。私たちがちゃんと付いてるから」

妃実ちゃんの笑顔はわたしを励ましてくれるもの。

「やっぱり」と思った。やっぱり妃実ちゃんも知っていたのだ。

葵と一番最初に会った時、妃実ちゃんの様子がおかしいと思ったのは正解で、妃実ちゃんも本当は葵のことを知っていたのだ。

そして、たぶん。

わたしも本当は葵のことを知っていたはずなのだ。

わたしたちはみんな知り合いなのに、わたしだけが葵のことを忘れてしまっていた。その理由を大和も妃実ちゃんも知っていて、わたしをこんなに気遣ってくれているのだと悟った。

わたしは葵を真っ直ぐに見つめた。葵もわたしを見つめていた。

初めから、その眼差しを「懐かしい」と感じていた。それはわたしが葵を知っていたからなのだ。わたしは心のどこかでは葵のことを憶えていたのだ。

なのにどうして記憶の中に葵のことがないのだろう。

「葵、あなたは誰？」

ずっと聞きたかったその言葉が口をついて出た。

葵は目を伏せ一度大きく深呼吸をすると、何かを決意した顔を上げた。

「オレは、大和や妃実香と同じで、里珠の幼なじみだよ」

葵のかすれた声に、なぜかわたしの目から一粒だけ涙が零れた。

*

*

*

それは十年前のある夏の日の事。

ある横断歩道で交通事故が起きた。

横断中の男の子と女の子が、信号無視のワゴン車にはねられた。

二人とも、何カ月にもわたり生死を彷徨う重体だった。

事故の数カ月後、男の子は家族と共にこの地を去って、女の子はもとの居場所で日常を取り戻した。

ひどい事故だったにも関わらず、女の子の体には少しも障害は残らずなんの後遺症もなかった。そのはずだった。

だけど、女の子はこの事故の記憶を全て失っていた。

共に事故に遭った男の子のことも、全て。

周囲の大人は、時間が経てば思い出すだろうと、無理に記憶を戻すことを控えた。

男の子の話をすると、女の子は酷い頭痛を訴え、時には気を失うことさえあった。

救急車のサイレンの音を聞くだけで、女の子の顔は青ざめ、体を震わせた。

あの事故は、女の子の体には障害を残さなかったが、心には大き

な傷を残していたのだ。

だから、女の子の前で交通事故の話をする者は誰もいなかった。まるで、そういった出来事など最初からなかったかのようにして過ごした。

そうして、時間はゆっくり過ぎて行った。

大和が話してくれたのは、こんな話だった。

そう。

この女の子はわたし。

そして、わたしと一緒に事故に遭った男の子が、葵。

*

*

*

「里珠、もう寝た？」

小さな妃実ちゃんの声に、わたしは軽く閉じていた目を開けた。

「うつん。起きてる」

横を見ると、妃実ちゃんと目が合った。部屋の電気は消えているけど、レースのカーテン越しに月灯りが差し込んで、ものを見るには困らない暗さだった。今日は満月だ。

わたしと妃実ちゃんは、大和の家の一室に布団を並べて横になっていた。

すっかり動揺しきっていたわたしを気遣い、大和が妃実ちゃんと一緒の部屋を用意してくれたのだ。

「眠れない？」

妃実ちゃんの問いかけに正直に頷くと、妃実ちゃんは吐息をついて微笑んだ。

「そうよね。急にあんなこと聞いたら眠れないよね」
「ん……」

わたしは小さく笑って視線を天井に向けた。

わたしは、全てを聞いた。

それはにわかには信じられない話で、混乱を極めたわたしは、ただ黙りこんで馬鹿みたいに涙を流していた。

頭の中で鐘を鳴らされているかのような頭痛がわたしを襲った。暑くもないのに汗が噴き出た。体は震え息は苦しくて、吐き気も込み上げてきた。

だけど、気を失わなかったのは、妃実ちゃんがずっと手を握ってくれていたからだ。

そして、大和がしっかりと肩を抱いてくれたからだ。それがなければ、わたしはさっさと意識を手放して、早く体が楽になる方を選んだと思う。

わたしは記憶を失っていた。

事故の記憶も、葵の記憶もわたしの中にはない。ないのではなく、奥底に沈んでしまったのか。

話を聞いた今も思い出すことはできない。思い出すのを拒否するかのように頭が痛んで、それ以上はどうしても記憶を引き出せなかった。

話をしている間、葵はずっとわたしを見ていた。泣いているわたしを見て、自分も泣きそうな顔をしていた。

例の事故の後、葵は家族と一緒に九州の方へ引っ越しをしたと言っていた。事故が直接の原因ではなく、たまたま親の転勤で決まったことらしかった。

だから、わたしが葵のことを憶えていなくても、生活していく上で何ら困ることはなかったのだ。ずっと近くにいなかったから。

だからといってそれでいいわけがない。忘れられていた、というのは葵にとって大きなショックだったろう。

十年ぶりに会った幼なじみが自分の事をきれいさっぱり忘れていたなんて、悲しくて寂しいことだと思う。

「忘れてしまつてごめんなさい」　葵に向つてそう言いたかったけど、わたしは言えなかった。

だって、わたしはまだ思い出せないからだ。

葵のことも事故のことも、話を聞いただけでわたし自身が思い出した訳ではない。

謝ることさえもできない。

それがもどかしくて辛かった。

「やっぱり、聞くの止めた方が良かった？」

妃実ちゃん言葉に、わたしは首を振った。

「そうは思わない。ちゃんと聞いて良かったと思うよ……ただ思い出せないのが悔しいの」

また涙が浮かんでしまった。

きつと精神的に不安定な状態なのだろう。気持ちがざわついてうまくコントロールできなかった。

妃実ちゃんがズルズルとわたしに近付いてきて、布団の中でわたしの手をぎゅっと握った。

「妃実ちゃん？」

「あんたさあ、子どもの頃から泣き虫で、よくなんだかんだで泣いては私の手をこうして握って付いて回ってたよね」

ため息交じりの妃実ちゃん言葉に、わたしは思わず笑ってしまった。

「それ、ずいぶんちっちゃい頃の話でしょ」

「まあね。でも、今でもこうしていると少しは落ち着かない？」

ニツと笑う妃実ちゃんに、わたしは頷いた。確かに、妃実ちゃんの手は落ち着く。ずっと昔から知っている「お姉ちゃん」の手だ。

「ありがとう」

「……里珠さ。私、葵の事は無理して思い出さなくてもいいと思うよ」

「えっ？」

思いがけない言葉に、わたしは思わず半分体を起こした。わたしを見返す妃実ちゃんの顔からさつきまでの笑みは消えていた。

「里珠には、ちゃんと昔の記憶はあるじゃない。私と遊んだことも大和との思い出もちゃんと憶えている。これまでそれでなんの不都合もなかったでしょう？ 頭が痛くなったり息が苦しくなったり…そんな思いしてまで葵の事思い出さなくてもいいよ」「
「だけど！」

思わず声が大きくなってしまった。隣の部屋では当の葵が寝ている。これぐらいの声、聞こえはしないと思うけれど、慌てて声を響めた。

「だけど、それじゃ葵が」

「葵がかわいそう？」

後を継いだ妃実ちゃんに、わたしはぐつと言葉を詰まらせた。妃実ちゃんの視線が鋭くなった。

「かわいそう？ 憶えてなくて葵に悪い？ そんな気持ちで自分の体を痛みつけるの？ あんたが発作起こして苦しむたびに、周りの人が あんたの両親とか大和がどれだけ心配してきたと思っているの？ またこれからもそういう心配をかけ続けるの？」

妃実ちゃんの言っていることはもっともで、押し殺した声が逆にわたしの心を鋭く抉った。

自分ではほとんど憶えていないけれど、きつと、わたしはこれまで周囲の人にたくさん心配をかけて来たのだろう。それを見ていた妃実ちゃんだから言えるのだ。

何も言い返すことができなかった。妃実ちゃんの表情が和らいだ。

「 厳しいこと言ってごめん。だけど、これが私の気持ちよ」

妃実ちゃんはようやくわたしから視線を逸らした。わたしも枕に頭を落ち着けたけれど、さっきまでとは違う苦しさで胸を渦巻いていた。頼もしく感じていた妃実ちゃんの手をそと離し、横になつて妃実ちゃんに背を向けた。背後で妃実ちゃんが小さく笑つたのがわかつた。

「私、事故のことを里珠に教えるのは反対だつたの。葵のことも、ただの大和の友達つてだけで済ませておけばいいよつて言つた。思ひ出さなくてもいいことつてあるのよつて。最初はそれで大和も葵も納得していたのに……結局こうなつちやつたのね」

「妃実ちゃん」

「ん？」

「葵がかわいそうだからじゃないの」

わたしは妃実ちゃんに背を向けたまま続けた。

「わたしが葵を思い出したいの。思ひ出さなきゃいけないつて、そう思うの」

憶えていなくて申し訳ないとも思う。だから思ひ出したい。その気持ちは当然だ。だけどそれ以上に、葵の眼差しに胸が痛む切なく感じるその理由が知りたかつた。

「わかつてるよ」

思ひがけなく、優しく妃実ちゃんが言つた。

「里珠は思い出たくて当たり前だよ。勝手な事言っでごめん。私、もう寝るわね。里珠も少しでも眠った方がいいわよ」

今度は妃実ちゃんが寝がえりを打つ心配がした。近くに感じていた体温が遠ざかる。わたしは小さく言葉を返した。

「おやすみ、妃実ちゃん……心配掛けてごめん」

「……おやすみ、里珠」

それきり妃実ちゃんとの会話は途切れ、わたしもそっと目を閉じた。

眠れないと思っていたのにいつの間にかしつかりと眠ってしまった私は、窓からの日差しの眩しさに目を開けた。

隣に寝てたはずの妃実ちゃんの様はすでになかった。布団も端にきちんと畳まれてある。何時だろうと思っただけを周りを見回してみただ、この部屋に時計は置いてないようだ。それでも太陽の高さからしてけっこういい時間だとはわかる。

わたしは布団を手早く畳んで部屋を出た。

勝手知ったる大和の家だ。行動に迷うことはなく、リビングに顔を出す前に洗面所に向かい顔を洗った。やっぱり寝起きの顔で人と会いたくはない。

さっぱりとしたところで改めて鏡の中の自分を眺める。

酷い顔している。

昨夜泣いたせいかわ、瞼が腫れぼったい。目の下にはしつかりとクマまで作って。心持ち顔全体がむくんでいるし、ろくに化粧も落とさず寝たから、肌はくすんでしまっている。

「化粧……」

バイト帰りのままだから、バッグの中にメイクポーチは入っていないはずだ。化粧をすることはできる。けど、無駄なあがきだろう。それにそんな気分にもなれなかった。

諦めのため息をついた時、廊下から人の足音が聞こえた。とっさにこちらに来るのかと身構えたけれど、足音はすぐに遠くなり、わたしは胸をなでおろした。

大和だろうか。妃実ちゃんかもしれない。それとも葵……。
その人の顔を思い出すと、ぐつと体が強張った。

葵　彼は幼なじみ。そう聞かされた。だけど、一晩経ってもわたしの中の記憶は甦る気配もない。ただ、切なくなるほどの懐かしさを胸に感じるだけ。

これは不確かな、感覚的なもので、記憶とは違う。

「ちゃんと思い出せるのかな……」

記憶を失った原因が葵と共に遭った交通事故にあつて、それを思い出そうとするとわたしの体が拒絶反応を起こすかのように発作を起こす。頭痛だったり、呼吸困難になったり。

それはたぶん、幼かったわたしが交通事故の事実を受け入れなかったからなのだろうと思う。

もしも今、それを受け入れることができれば、発作など起こすこともなく、葵のことも思い出すのだろうか。

「フ……」

なぜか笑いが漏れた。

まるで他人事のような気がする。まさか自分が記憶喪失だったなんて、これまでまったく思いもしなかった。やっぱりなかなか信じられない。

だけど、これが現実なんだろう。だったら受け入れるしかないのだ。

わたしは鏡の中の自分を見つめ、気合を入れるかのように頬を両手でピシヤリと叩いた。

*

*

*

リビングに入りまず時間を確かめ、わたしは軽く驚いた。もう十時だ。

大学はもう午前中は間に合わない。いまさら焦っても仕方がないし、あっさりと諦めた。ついでにもう午後も休んでしまおう。運良く、今日は休んでもたいして差し支えのない講義ばかりだった。

「あ。おはよう、里珠。ゆっくり眠れた？」

ソファーに座って新聞を読んでいた大和が顔を上げた。

「なんか飲むだろ？」

そう言ってやさしく笑いながら立ち上がる。そのいつもと変わらない笑顔に少し気持ちが和んだ。

「ありがとう。でも自分でやるよ」

「いいから、座ってるって」

「でも……」

答えながらさりげなく周囲を見回す。やっぱり大和以外は誰もいない。キッチンでサーバーからコーヒーを注ぎながら大和がクスツと笑った。

「葵ならもう出掛けたからいないよ」

見透かされている。気恥しくなりながらも、その人がいないことにホツとしてしまった。やっぱり、葵と顔を合わせるのが今は

少し怖い気がした。

「出掛けたって、どこに……まさかまたあの」

「河川敷の方まで行ってくつて、俺の自転車借りてった」

大和がさり気なく答えた。あの横断歩道のことにはわたしが触れないようにしてくれてるのかもしれない。

「とりあえず座って」

「うん」

ソファーに座ると大和がカップを渡してくれた。わたしの為に入れてくれたコーヒーは、ぬるめのカフェオレ。手にカップを持っていても熱くない。わたしが熱いのが苦手なのを大和はよく知っている。大和がわたしの隣に腰を下ろし、静かに肩に腕を回してくれた。その感触に思わず目を閉じた。ホッとする……わたしにとって大和の腕の中は落ち着く場所の一つだ。

「妃実ちゃんは？」

「朝早くに帰ったよ。一度家に帰ってから学校行ってくつてさ。休めな
い講義があるらしい。里珠にごめんって伝えてって言われたけ
ど」

「妃実ちゃんが？」

目を丸くしたわたしの顔を大和が首を傾げて覗きこむ。

「昨日、妃実香と何か話したか？」

昨日の妃実ちゃんとの会話を思い出し、わたしはなんとなく妃実
ちゃんの「ごめん」の意味を理解した。でもそれは謝ってもらったこ

とではないのだけど。

「……葵のこと、無理に思い出すなって言われた」

大和は黙ってわたしの言葉に耳を傾けた。

「わたしが発作起こして苦しむたびに、大和やわたしの両親がどれだけ心配するかわかってるのかって」

「……そう」

「昔の事故のこと、わたしに教えるの妃実ちゃんは反対だったんだってね」

大和は長い息をつきながら天井を仰いだ。

「それは妃実香だけじゃなくて、俺も同じだったよ」

そう言うと大和はしばらく黙りこんでしまった。何かを考えているのか、一点を見つめたまま視線すら動かさない。

やがて、長い吐息と共に目を閉じると、小さな声で話し始めた。

「あの日葵が急にやってきて俺は……とにかく戸惑った。突然やってきた幼なじみを前に俺が感じたのは『懐かしさ』よりも前に『恐れ』だったよ」

「恐れ？」

思いもしない言葉につい繰り返すと、大和は小さく口許を歪めただけで話を続けた。

「あいつを里珠には会わせたくなかった。だけど、それもできず……ならば、せめて、事故のことや昔のことには触れないでくれと葵

に言った」

「……」

大和が再びわたしの目を覗き込んだ。

「俺、酷いだろ？」

「え？」

「幼なじみに平気でそういう事を言えたんだ、俺は。葵は里珠との再会を喜んでいただけなのに、それを隠して初対面のふりをすると言ったんだよ」

自嘲するような大和の言葉にチクリと胸が痛んだ。確かに、葵のことを思えば大和の言葉は残酷だ。だけど、大和はわたしのためにそう言ったんだ。大和に残酷な言葉を言わせたのはほかでもない、わたしなのだ。

「……ごめん」

つい声を落としたわたしの頭を大和がくしゃくしゃと撫でた。

「里珠が謝るな。里珠は何も悪くはない」

そうだろうか。自分にとって辛い記憶を消して、周りの人たちに心配をかけてるわたしが「何も悪くない」　　そういうことがあるわけがない。

だけど、何を言っても大和はわたしを庇うだろう。それがわかって何も言えなかった。

「結果的には昨日のようなことになってしまったけど……それだけ葵は……」

大和はそれ以上言葉を継がなかった。

急に静まり返った室内に、時計の秒針の音がやけに大きく聞こえた。

この部屋は明るい日差しに溢れているのに、ここにある空気は暗くて重い。まるで大和の心がそのまま漂っているかのような気がした。

幼なじみの心を傷付けていたことに大和も深く傷ついている。

それがわかるのに、わたしにはどうすることもできなかった。

わたしの記憶がない。それが一番の元凶。それなのに、自分では何もできない。それが悔しい。

だけど、こんなわたしを大和は守ってくれようとしていた。それは痛いほどわかって、こんな状況なのに嬉しく感じてしまう自分勝手なわたしもいる。

わたしは手にしたカップを口に運んだ。適度に温かったカフェオレは、もうかなり冷めてしまっている。それでも甘い優しい味がした。

「美味しい」

わたしがそう言って笑うと、大和がふわりと表情を緩めた。そして、ゆっくりとわたしの額に口付けた。

「……好きだよ」

そのストレートで唐突な言葉に、わたしは目を見開く。

いつもなら照れ隠しに茶化して返すところだけど、今の大和の声はそれができないほど真剣な響きで、わたしの心を大きく揺さぶった。

た。
そういえば、この前の電話でも突然こんなことがあったような気がする。

「大和……？」

思わず首を傾げると、大和はささやかな微笑みを返してくれた。

「里珠。この先里珠の記憶が戻って、里珠がどんなことを思い出しても……里珠の気持ちがどんなに動いても、俺のこの気持ちは揺るがないから。それは憶えておいて欲しい」

それは耳に心地いくらい静かな声だったけれど、なぜだか泣きたくなるほど切なくなつた。

「……………どうしてそういうこと言うの？」

小さく聞き返したわたしに大和はただ微笑んで、もう一度額にキスをくれただけだった。

(第1話 おわり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8875w/>

それでも君はここにいる

2011年10月13日10時16分発行